

## 言語接触と言語の構造

—ソルブ語に見られるドイツ語の影響のケースを中心に—

三谷 恵子

0. 言語接触は言語構造のさまざまな面に影響を及ぼし、歴史的に見てもまた共時的研究においても興味深い材料を提供してくれる。言語接触の問題を考えることは、言語構造の中で他言語の影響を受けやすい部分、受けにくい部分とはどういったところか、また他言語の影響を受ける場合、元の言語の構造がどのようにその影響を同化するのかといった問題を考えることである。これは、当該言語にとって何が本質的な特徴なのかを考える上で貴重な観察であり、マテジウスの言った『言語の性格学』の研究にも通じることであろう。しかし同時に、そこに観察される現象が単純な接触の結果なのか、あるいはもっと複雑な要因を考慮すべき事柄なのかという問題にも注意を払わなければならない。一見言語接触の結果と思われがちな事象でも、当該言語内部の自生的な現象という可能性は常に考慮しなければならない。従って似たような接触にあると考えられる、あるいは逆に、接触の要因が考えられないような同族の他言語や方言との比較、あるいはより一般的な通時的現象の考察が重要な意味を持ってくる。

スラヴ諸語は、方言的な差異に富みながら全体として近似性の高い言語構造を保っている。またスラブ世界は西側でゲルマン世界と接触し、多くの地域がドイツ語圏の国家や社会集団と政治的、文化的に密接に関係してきた。しかもその関係の程度もさまざまである。こうした要因、ならびに上で述べた事柄を鑑みると、スラヴ・ゲルマンの言語接触の問題はスラヴ学にとってきわめて興味深い課題であり、それゆえに多くの研究者の注目を引いてきたという事実も納得できる。

以下では、その歴史を通じてドイツ語の影響を受け、また今日でもバイリンガリズムとしてドイツ語と接触が絶えないソルブ語の若干の事例を中心にスラヴ語における言語接触の姿を参照しながら、言語接触の問題を考える場合に何を考慮しなければならないかについて考察してみたい。

1.0. 他言語との接触は音、語彙、形態カテゴリー、構文特徴など、言語を特徴づけるさまざまなレベルに影響を与える。その中で語彙が他言語の影響に最も寛容であることは容易に想像されることであるし、またよく指摘されることもある。語彙的な影響はそれだけでは受け入れ側の言語の構造それ自体を脅かしはしない。しかし、語彙的受容がある量的限界や頻度を超えると、体系的な変化を引き起こす

干渉に変化するだろう。そこではたとえば新しい音素の形成や分布の変化、従来はなかった文法カテゴリーの形成などが生じる。ソルブードイツの接触も歴史をたどれば、コンパクトなソルブ語使用地域であったラウジツ地方にドイツ人が移住してきたことによって始まったわけだが、当然初めは語彙的な影響だったと考えられる。だがそうした接触が次第に言語体系全体のなかに浸透していったわけである。そこでまず、音韻体系の中に定着したドイツ語の影響に関する問題を二つ、先行研究に依拠しながら取り上げてみたい。

### 1.1. ソルブ語の[R]

上、下ソルブ語に共通する際立った音韻的特徴として /r/ の発音が挙げられる。スラヴ語の /r/ は普通、トリルを伴う歯茎音 alveolar trill の [r] で発音されるが、ソルブ語ではいわゆる口蓋垂音 [R] になる：serbski (adj. "ソルブの") [seRsk'i], ratar(農民) [RataR]. ただし、実際には振動を伴わない摩擦音 [R]、あるいはドイツ語の語末や子音の前でそうなるように [r̥] で発音されることが多いように思われる。

もちろんこの [R], [R̥] は /r/ の自由変音。この [R] がドイツ語の影響であることはしばしば指摘されることである(たとえば Schaarschmidt 1978: 337)。

### 1.2. ch /x/ と /x/ の異音としての [k'] について

複雑な現象として、有気閉鎖音の [k'] の問題がある。これは言語接触というテーマに関連して非常に興味深い問題であるが、ソルブ語およびドイツ語の方言学的および通時論的知識を要し、本稿の筆者が独自の考えを示すには力の及ばない領域である。そこで以下では主として Schaarschmidt (1978)に基づきながら、問題を概観していきたい。

1.2.1. 上ソルブ語の書記素 ch は音素 /x/ に対応し、5つの異音で実現される。そのパターンは凡そ次のようになる(ここでは記述の簡潔化のために生成音韻論'風'の記述方式をとった。すなわち矢印の先に異音、スラッシュの先にそれが現われる環境が示される。アンダーラインの位置が問題の異音)：

$$(1) \text{ ch } /x/ \rightarrow [k'] \neq [V]$$

例：語頭 chodžić [k'odžič] (歩いて通う、歩き回る рус. ходить); chěža [k'eža] (家)；他に chilič so [k'ilič so] (身を曲げる、屈める), chwalič [k'užalič]; tchór (< \*dъxor イタチの一種); 形態素の初め：wuchodžić [uuk'odžič]; přechwalič [pšek'užalič].

$$(2) \text{ ch } /x/ \rightarrow [k] \neq [\text{sonant}]$$

例：chlěb [klěp] (パン cf. Pyc. хлеб, S-Cr. hleb); chribjet [kribjet] (背中、腰) なお、(1)(2)のような語頭の /x/ (= [k/k']) は 1949 年以前の正書法では kh と表記されていた：khwalič, khlěb.

(3) ch /x/ → [ç]  $\left\{ \begin{array}{l} C \\ +\text{frontV} \end{array} \right\} -$

この [ç] はいわゆるドイツ語の *Ich-Laut.* mnich (Dt. Mönch) [mniç] ; morchej (にんじん) [morçej] ただし多くの場合次の(4)と競合する

(4) ch /x/ → [x']  $\left\{ \begin{array}{l} C \\ +\text{frontV} \end{array} \right\} - [\text{+frontV}]$

morchej(にんじん) [morçej/morx'ej]; suchi(adj. 乾いた) [suçi/sux'i]

(5) 上記以外の場合 [x]

いわゆるドイツ語の *Ach-Laut.* słuchać (聞こえる) [suxač]

このように、上ソルブ語では語頭の /x/ には有気もしくは無気の閉鎖音 k が現われ、それ以外の位置では摩擦音の [ç, x, x'] が現われるという特徴がある。この中で有気閉鎖音の [k'] は上ソルブ語にしか現われない (cf. SSA Bd.13, p169)。下ソルブ語では北東方言などに一部見られるだけである。下ソルブ語方言には [x-] ~ [k-] の交替はある : kmjel (ホップ. cf. <上ソ> chmjel. Rus. хмель) ; kšěn (わさび <上ソ> chrěn. Rus. хрѣн). この非摩擦音化現象 (x → kh → k) は他のスラヴ語方言、たとえばチェコ語の方言にもみられる (kvála, kvíl'a など) が、但しどちらの場合も母音の前の位置での非摩擦音化 (x → k) は起きない。大部分の下ソルブ語では、上ソルブ語で閉鎖音が現われる語頭の /x/ は [x] のままで実現される (chojžiš, chylka [一瞬], chwališ いずれも [x])。一方、有気閉鎖音の [k'] をもつスラヴ語方言は少ないが、ないわけではない。例えばカリンティア (Carinthia = オーストリア、ケルンテン) 南部のスロヴェニア方言にも [k'] があるが、これは /x/ の異音ではなく /k/ の異音。これについては Isačenko, A.V.; "Narečje vasi Sele na Rožu." Ljubljana: Učiteljska tiskarna, 1939, pp37-38. にすでに言及があるという。ソルブ語と同じようにカリンティア地域はドイツ語との二重言語使用地域であり、Isačenko はこのスロヴェニア方言の現象をドイツ語の影響としている。確かにこの地方のドイツ語 (南バイエルン・南オーストリア方言) は閉鎖音の有氣化によって特徴づけられる (たとえば Kchalt [k<sup>X</sup>alt] 寒い)。ちなみにこの地方はまた、ソルブ語同様 /r/ に口蓋垂音の [R] の発音をもっている。

1.2.2. では、上ソルブ語の特徴である語頭の有気閉鎖音 [k'] はどのように説明されるのだろうか。これがドイツ語からの影響であるとするなら、どのようにして生じたのか、また同じようにドイツ語との二重言語地域にある下ソルブ方言に、ご

く一部の例外を除きこれが現われるのはなぜだろうか。

上ソルブ語の[k']についてはJagić以来、ソルブ語の自生的現象とする立場が一方にあった。この立場をとるSchuster-Sewcによればx-からk'への移行はまず、語頭のx+自鳴音(r, l, w, m)の結合が異化をおこしx+(r, l, w, m) > k'+(r, l, w, m)となり、さらにこのプロセスが母音との結合の場合に及んだと説明される(Schuster-Sewc, H. "Die Genese des aspirierten Konsonanten *k<sup>h</sup>* im Obersorbischen," Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung, 25 (1972) [Schaarschmidt : 342]). 異化の過程でxがkにならずk'になったのは機能的負荷の原則により、つまりxがkに移行すると/k/に課せられる機能的負荷が大きくなりすぎるため、と説明する。つまりSchuster-Sewcの考えでは上ソルブ語の変化は

(1) xr, xl, xw>k'r, k'l, k'w ("異化")

(2) (1)の影響で#\_Vの位置でx>k'となる一方、k'r-, k'l-は脱有氣化してkr, kl

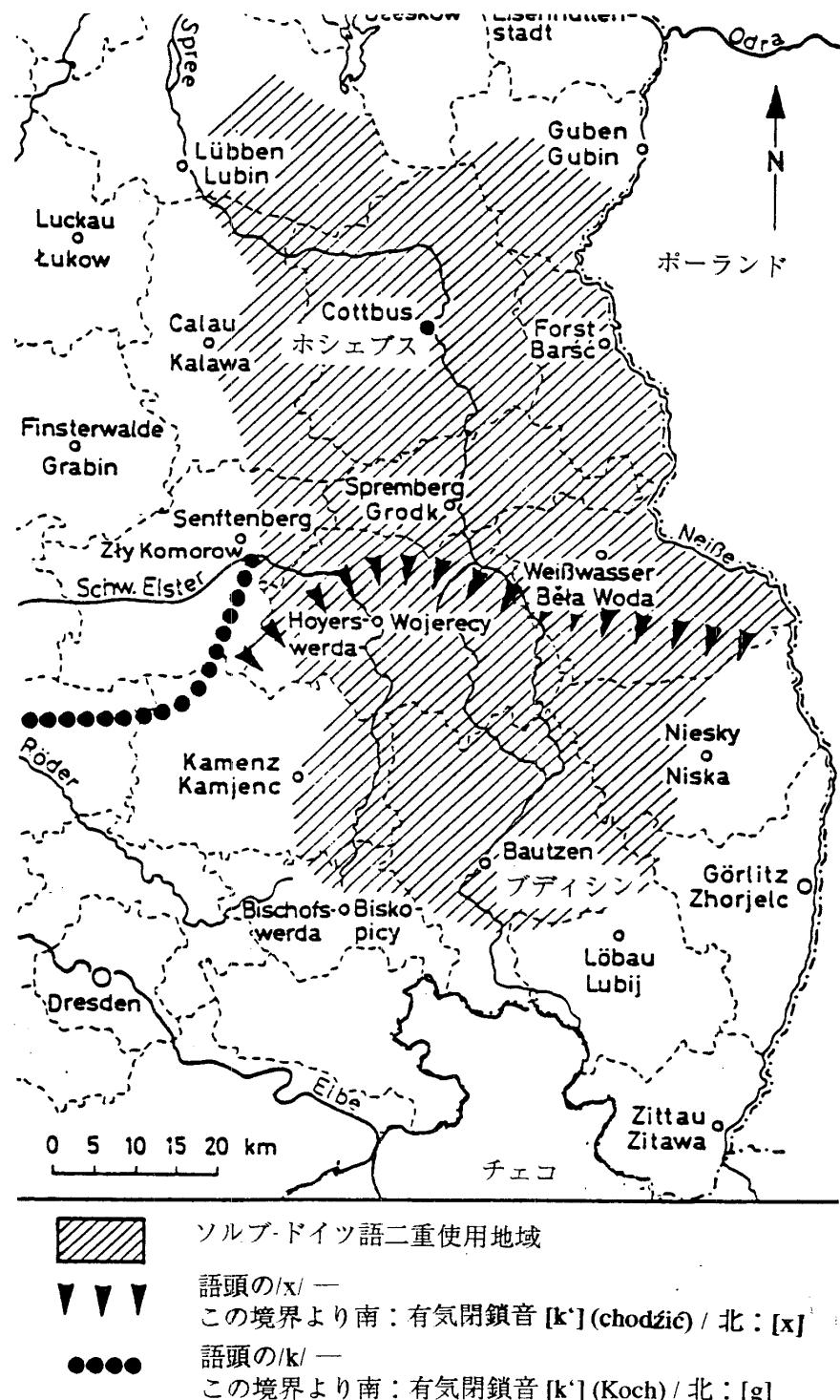
という変化を辿ったことになる。これは十分ありそうなことにも思われるが、この説明のようにソルブ語独自の発展において"異化"のプロセスによりx>k'が生じたのなら、なぜ下ソルブ語ではこの現象が生じなかつた（あるいは生じても部分的にしか現われなかつた）のだろうか。上ソルブ語の領域にだけ有氣閉鎖音のk'が現われたのはなぜなのか、いま一つ明確にならない。Schuster-Sewcは機能的負荷や、語頭でのkの低い頻度といったことを要因としているようだが、そういう事柄がはたしてどこまで決定的なのか、証明は困難なように思われる。

これに対しドイツ語との接触による現象と見るSchaarschmidtは、この地域への東中部ドイツ語方言からの影響という説をたてる。上ソルブ語使用領域と接するドイツ語には、語頭で母音に先立つ場合の/k/に有氣閉鎖音の[k']が現われる特徴があり ("Küche" → k'içe; "koch" → k'qx.) 、一方同じ語頭でも自鳴音の前では/k/の有氣化は非常に弱いか、全く起こらないという現象が見られる。この有氣／無氣の分布は上ソルブ語の語頭の/x/の[k']と[k]の分布と対応する。ドイツ語方言の後者の/k/つまり無声で発音される非有氣軟口蓋音(gで表記される)は、ラウジツ中部より北と接する、中部ドイツ語と低ドイツ語との移行地帯の方言にも共通する。こちらでは/k/は母音の前でも自鳴音の前でも非有氣音で実現される。要するに、k'/gの対立が現われるか現われないかの等語線は、ソルブ語における[k']と[x]の等語線と連続するのである<sup>1</sup>。

ここで問題は、摩擦音のxから閉鎖音のkへの移行と、語頭の有氣音の出現という二つの事柄を含んでおり、両者の複合的な関係によって説明されなければならぬ。なぜならソルブ語（特に上ソルブ語）の[k']は語頭の/x/の異音と /k/ の異音とい

<sup>1</sup> 地図（次ページ）参照

参考地図 Schaarschmidt (1978), 340より



う二つの面を持っており、また語頭の有氣化についてはほかの閉鎖音の有氣化 (p', t') との関係も考慮に入れなければならないからである。

まず、摩擦音から閉鎖音kへ (i.e. x-~k-) の移行について、Schaarschmidtはドイツ語の語頭の/x/が古高ドイツ語の時代に[h]になっていたことを、変化を可能にした一つの基盤的な要因と見る。つまり語頭に[x]を持たないドイツ語との接触が頻繁になったことによって、ソルブ語でも語頭の/x/ (当初はまだ[x]に近い音で発音されていたと考える) が別の音に置き換えられる下地が作られたと考えるのである。もちろんこれだけでは上ソルブ語の有氣閉鎖音[k']の出現を説明できない。そこでx→k'に先立って、kの有氣化 (k→k' [k<sup>h</sup>]) がドイツ語方言からの影響で起こっていたという想定が重要な意味を持つ。これは実際に/k/の異音としてのk'の存在 (主としてドイツ語からの借用語 : kapela [k'apela] < Kapelle ; kovej [k'ovej] < Kaffee) と、上述の「k'/gの対立が現われるか現われないかの等語線は、ソルブ語における[k']と[x]の等語線と連続する」事実から予想されることで、つまり母音の前の語頭でのk→k' [k<sup>h</sup>] の移行が、x→k<sup>h</sup>のいわば呼び水となったと見るのである。それゆえにkの有氣化の特徴を持たなかったドイツ語方言と古く接していた下ソルブ地方ではx→k' (あるいはx→k) への移行が生じなかつたと理由づけることができる。

こう考えた場合、変化が実際にいつごろから生じたかが問題となるが、この問題について文献から後づけることは非常に困難であると言わざるをえない。それは単にソルブ語で書かれた最古の文献が16世紀であるという事実によるだけではなく、綴りの習慣と音価の変化は必ずしも一致しないという一般的な原則にもよる。上記1.2.1の(2)で示したように語頭の/x/をkhと綴る習慣は比較的新しく、17世紀後半ごろから頻繁に見られるようになるが、しかし/x/ (x, ch) をkhと綴るようになるはるか以前からk'の発音が定着していた可能性は十分に考えられる。恐らくは、ドイツ東方移住政策が進んでいった11世紀頃から音の変化は序々に生じており、始めはドイツ語の借用語から (この時代にはまだラウジツはコンパクトなソルブ語使用地域であった) 、後に次第にドイツ人とドイツ語の影響が増すに連れてソルブ語の語彙全体に浸透したと Schaarschmidtは見ていている。

ソルブ語の音韻体系全体のなかでx～k-の変化が起り始めた時代を推定することは可能で、その根拠はrの歯擦音化という現象からもたらされる。現在のソルブ語のrの歯擦音ř (現在の標準語の発音は[š]. 下ソルブではsと綴る) は無声閉鎖音(k, p, t) の後にしか生じない : <上ソ> pří, <下ソ> pší (< \*pri) ; <上ソ> kříwy, <下ソ> kšíwy (< \*krivu) ; <上ソ> třečí (< \*tretí)。ところで、上ソルブ語では/x/起源の[k]のあとではこの現象は起きないのである : chribjet [kr'ibjet] (\*chřibjet), chrěn [krěn] (\*křcn). つまり、rの歯擦音化が生じた時代には/x/はまだ[x]かそれに近い音であったと推測することができる。さまざまな地名にのこされた語形から見て、無声閉鎖音に続くrの歯擦音化は14世紀半ばには完了していたと考えられるので、結局、語頭のxが無声

閉鎖音のkの系列に体系的に移行したのはそれ以後であろうと見ることができる。  
そこで、全体の変化は

- ①接触の初期（11～14世紀） 語頭の/k/ → k'([kh])
- ②これが素地となって14世紀半ば以降17世紀までに  
    語頭の/x/が無声閉鎖音化し 母音の前で → k'([kh])  
    自鳴音の前でk

という経過をたどったものと記述できる。

**1.2.3.** 下ソルブ語に全体として語頭のx～k'/kの変化が生じなかったのは、早い時期の下ソルブ地域へのドイツ語の影響が、主として、語頭閉鎖音に有気性の特徴を持たない低ドイツ語の話し手がこの地域に入植して生じた、つまり上記①の素地がなかったことによって説明される（低ドイツ語の下ソルブ語への影響は、下ソルブ語に低ドイツ語方言の語彙が沢山見られることで想像される）。後に（16世紀以降）なって語頭に有気閉鎖音の[k']が現われる特徴を持つ東中部ドイツ語のラウジツツ・シュレジア方言の影響をうけて局地的に語頭の有気閉鎖音が見られるようになった。下ソルブ語で有気閉鎖音[k']が現われるのは主に北東方言で、系統的にというよりは散発的に見られる：k'osć ([馬などの]しっぽ cf. Rus. хвост; Pol. chwoszcz. (SSA III, p299) この地域にはまた、p', t'などほかの閉鎖音にも語頭で有気化する現象が観察される。（おもしろいのは、上ソルブ語方言には[k']以外に閉鎖音の有気化の現象があまり見られないことで、これもまた、上ソルブ語と接触する東中ドイツ語方言の特徴と一致するという。）下ソルブ語方言に見られる語頭閉鎖音の有気化は第二次大戦後、シロンスク（シレジア）地方からラウジツツ（下ソルブ地域）へシュレジア方言の話し手であるドイツ人が移住したことにより強まった傾向と見られる。

以上の議論が示すように、一つの音素の変化にはいくつかの要因が複合的に関係している場合が多い。言語接触と、実際に見られる事象との因果関係を突き止める場合に単純な考察では説明できない事例の一つと言うことができる。

## 2.0. 他言語の影響下に新しい表現形式が作られる場合、そのパターンは大きく

- (1) 直接借用
- (2) 複写

の二つに分けられよう。（1）の直接借用とは他言語の要素がそのままの形式で採用されるもので、言語においては語彙面に非常に顕著に現われる。通常言われる「外来語」のような場合である。（2）の複写には単純なケースから複合的な場合までが含まれるが、今ここでは次のような場合であるとしておこう：

ある概念（意味範疇、文法的機能でもよい） $C_1$ に対応する表現が言語 $L_1$ で $E_1$ という形式をとるとする。また、同じ概念 $C_1$ が別の言語 $L_2$ では $E_2$ として形式化されるとする。つまり概念 $C_1$ について $E_1 (C_1) \Leftrightarrow E_2 (C_1)$ という形式上の対応関係が成立している。ところで $E_1$ には $C_1$ 以外に別の概念 $C_2$ を表わす機能もあるとする。ここで、 $L_2$ に概念 $C_2$ に対応する形式がない、あるいはあってもまったく別の形式が使用されるというような場合、本来 $C_2$ を表わす機能を持っていなかった $L_2$ の形式 $E_2$ にも、 $L_1 (c1)$ に習って等しく $C_2$ を表わす機能が付与されるということが生じる。つまり

$$\begin{aligned} C_1 \text{に関する } E_1 : E_2 &= C_2 \text{に関する } E_1 : X \\ \therefore X &= E_2 \end{aligned}$$

という、「比較の第三項tertium comparationis」の単純な図式に当てはめられるような関係が起こる。同じことをワインライヒは、言語の干渉における「同価形態素の模写機能」というテーマの中で、次のように述べている：

「もし、二国語併用者が、言語Aの形態素ないしは文法カテゴリーのどれかを、言語Bのそれらと同一視するようであれば、その人は、Aの体系から導き出した文法上の諸機能に、B形態を適応してしまうということも起こりうる。

二国語併用者に、両言語の間に見られる種々の形態素や諸カテゴリーの両価性を定着させるものは、それらの『形態上の類似 (formal similarity)』か、もしくは、『既存の諸機能における類似性 (similarity in preexisting function)』のいずれかによっている。」（U. ワインライヒ 1974 [邦訳1976] 82ページ）この箇所でワインライヒは言語の干渉のさまざまな興味深い事例を示している。たとえば「シロンスク（シレジア）のポーランド語方言ではドイツ語の影響で3人称複数形によるていねい語の用法がある：Dokąd idą? はWohin gehen Sie?に対応する表現になる」というような事柄である。

この指摘を念頭に、以下では「複写」が統語論的なレベルで生じる場合のケースを見ていきたい。

## 2.1. ドイツ語の存在表現

(D1) Es gibt Kartoffeln. じゃがいもある

に対応する上ソルブ語の表現に次のような構文がある (Mihalk 1966: 422-424) :

(S1) Wone dawa běrny. (意味は同じ)

(D1)の意味に対応する上ソルブ標準語の形式は(S0) Su běrny. [su:byćの三人称複数(存在を表わすbyć) + 複数主格名詞]である。形式(S1)は方言だが、(D1)の構文で用いられる動詞gebenをそのまま対応のソルブ語の動詞dawać(与える)で、また形式主語のesを三人称中性单数の人称代名詞woneに置き換えており、形式上の対応をそ

のまま再現した「なぞり」の形になっている。これは形態上の対応を機能的な対応に一対一で模写したもっとも単純なものと見ることができよう。同じ(D1)をモデルとする次のケースは、形式のなぞりと意味機能の対応が今少し入り組んでいる：

(S2) Dawaja běrny. (意味は同じ)

gebenに対応してdawaćが用いられている点は(S1)と同じだが、述語に、スラブ語に特徴的な不定人称の形式が現われている。ここでは形式上の借用 (geben →dawać) と'es gibt'の無人称形式の三人称単数→不定人称の三人称複数への移行が重なっている。

2.2. ドイツ語では上述の(D1)のような場合をはじめ、esを形式的な主語として無人称文が作られる。たとえばドイツ語では

(D3) Es donnert. 雷が鳴る

(D4) Es ist heiß. 暑い

のようになる。これに対応する文は上ソルブ標準形ではそれぞれ

(S3) Hrima (so). cf. Pyc. Гремит. S-Cr. Grmi.

(S4) Je čopło. cf. S-Cr. Toplo je.

と、他のスラヴ語のように無主語の無人称文となる。しかしその一方で、人称代名詞三人称単数<上ソ> won, wono/wone, <下ソ> won, wono, あるいは指示代名詞三人称単数を形式上の主語とする構文もある（いずれも中性形が使用される場合が最も多い）。この形は現在の標準語では<上ソ>, <下ソ>ともに認められていない（標準語から排除された）が、ソルブ語の最古の文献から見られ、また方言では今日でも使用される。

2.2.1. 上ソルブ：上ソルブ語においては最古期の文献から既にwono/woneを用いた記述が見られる（以下の例はSchuster-Sewc 1974: 342-343）：

Wono tak wohlada... (Es sieht so aus... かくのように見える[18世紀の上ソルブ語彙集]

Won nastawa tón běrny čas. (Es kommt die Kartoffelzeit. じゃがいもの季節が来る  
[Smoler])

（この場合、běrny časと一致して男性単数の形式wonをとっている）

ドイツ語と異なる点は、言うまでもなく、形式上の主語の使用は義務的でなく、ゼロ主語構文と競合関係にある点である。形式上の主語が文頭に立たない場合にはゼロ形式主語となる傾向があるように見える。例えば

Es regnet. - Wono so deščuje. (雨が降る)

に対し

Wonka so deščuje. (Draußen regnet es. 外は雨だ.)

形式上の主語が現われやすい場合とそうでない場合に、何らかの傾向があるかどうかは実際に文献を細かく調べて見る必要があり、今の段階で断定的なことは言えないが、Schuster-Sewc(1974)の例から見る限り、天候や自然現象を表す無人称文では

形式主語を置くドイツ語のタイプのなぞりが現われる傾向が多いように見られる。事実、文頭にEsが現われるEs war einmal ...[あるとき…]はBěše jónu (běše < byćの Imperfekt, 3.sg; jónu "einmal"), Es geschah aber...[結局…となった]はSta so pak (stać so= geschehen, pak=aber) のように、無主語の形式も残されている。但し、この場合には指示代名詞のToを用いた形が現われることがある：

To je byl raz jědn gólc. (Es war einmal ein Junge. (上下ソルブの中間方言からのテクスト) 今の標準語ではJe był...あるいはRaz je był...となるところ。一方、自然現象を表す無人称文で、wono/woneでなく指示代名詞toによって形式主語が表される例は上ソルブでは歴史的にも、現在の方言でも見られない。ごくまれに、下ソルブの強い影響を受けている上ソルブ北部方言にtoの使用があるという。

wono/woneを用いた構文は、19世紀中期以後のソルブ語文章語形成期から排除され始めた。これはゲルマニズムの排除と、他のスラヴ文章語（特にチェコ語）をモデルとした標準語形成の傾向の中に位置付けられるが、しかし一方、民衆の方言の中には今日も残っている。例えばSchuster-Sewcが行なったアンケートではEs ist kaltに対してWono je zyma (標準形はJe zyma. あるいはZyma je.)という解答が得られたという (Schuster-Sewc 1974: 344)

**2.2.2. 下ソルブ語：**下ソルブ語でも最古期ならびに中期（19世紀始め）まではwonoが使用されていたが、今では指示代名詞中性形のtoが代わって使用されている。そこで：Es regnet.は<下ソ>[方言] To se pada. To se dešćowi.

上ソルブ語と同様、形式上の主語が文頭に立たない構文の場合にはゼロ形式となる傾向があるが、この傾向は上ソルブ語ほど顕著ではなく、全体として形式主語を用いる構文を排除する傾向はその歴史を通して弱かった。これは下ソルブ語全体における「純化」の動きが上ソルブに比べて鈍かったことと関係すると考えられる。

**2.2.3. 形式主語を置くドイツ語構文のなぞり**に関して、上記のソルブ語の場合と平行的な現象としてスロヴェニア語のケースが連想される。19世紀の人文学者E.Kopitarが1808/1809に著した"Grammatik der slavischen Sprache in Krain, Kärnten und Steyermark"(クライン、ケルンテン、シュタイエルマルクにおけるスラヴ語文法)の中には色々なレベルのゲルマニズムが見られるが、そこに例えば"Ono je res, da..." = "Es ist wahr, daß..."(現在の標準語ではもちろん、無主語の"Res je, da..."[確かに；本当のところ…])がある(Toporišič 1991:17)。これも、この地域のドイツ語との接触という歴史的な背景に鑑みてドイツ語の影響の一つと指摘される事象である。ただ、形式主語を置くこうした無人称主語がどの程度の頻度であったのかは、不明である。

ソルブ語において観察される、形式主語を含む無人称構文はドイツ語からの強い影響とみなすことができそうだが、スラヴ語全体の枠組みの中で考えると、新たな問題が生じてくる。それは、他のスラヴ語の多くの方言にも人称代名詞あるいは指示代名詞（多くの場合その中性単数形）を形式的な主語とした構文が多少なりとも

観察されることである。こうした現象は個々に扱われるべきものなのか、あるいは相互に関連づけられるものなのか。個々の言語の自然発生的なものなのか、なんらかの言語接触の結果なのか。このあたりは検討を要する点であろう。例えば、現在のスロヴェニアに接するイタリアの北西部Resiutta(スロヴェニア式にはNa Bili)のイタリア語使用地域におけるスロヴェニア方言にも指示代名詞中性三人称のtoが形式上の主語として用いられる例（例えばTo ne lije 雨は降ってない。ドイツ語で言えば"Es regnet nicht"となるところ）が観察されたという。しかしこの地域のスロヴェニア語へのドイツ語の影響は考えにくいし、直接的に接触の関係にあるイタリア語、あるいはそのフリウリ方言には、無人称構文に形式主語を用いるケースはない(cf. It. Nevica. [雪が降る] あるいはE impossibile...("[It] is impossible")）。だとすれば、この形式主語はどこから来たのだろうか。

また、形式主語の現われる無人称文のタイプ、中性指示代名詞の機能の違い（全くな「形式主語」の場合、「主題」をあらわす形式主語に近い場合など）とどう関連するのかといった角度からも検討する必要がある。

### 3.0. 次にソルブ語の受動構文に関する例を見ることにしよう。

現在のソルブ語の受動表現は、再帰動詞(再帰代名詞so)を用いる場合と、受動分詞を用いる場合がある。ソルブ語で特徴的なのは、受動構文にだけ用いられる助動詞bu- + 受動分詞の分析的な形態があるので、この形式は「直接受動」と呼ばれる(Faßke 1980: 211)。上ソルブ標準語の例をpochwalić (pf) - chwalić ("loben" 賞賛する)で見ると、その形態は次表1のとおりである（意味は「賞賛される」）<sup>2</sup>：

<表1>

sg.	du.	pl.
1. buch (po)chwaledny, -a	buchmoj pochwalenaj*, -nej	buchmy pochwaleńi*, -ne
2. bu (po)chwaledny, -a	buštaj pochwalenaj* buštej pochwalenej	bušće pochwaleńi*, -ne
3. bu (po)chwaledny, -a	buštaj pochwalenaj* buštej pochwalenej	buchu pochwaleńi*, -ne

\*男性人間形

ところで、ソルブ語文献を過去にたどると、受動表現として過去に現われた主なものには

- ① (他) 動詞+再帰代名詞のenclitic form 対格so/seによる再帰動詞を用いる
- ② byti (今の標準形は<上ソ> być; <下ソ>. byś.) の現在形を助動詞とし、動詞の受動分詞を用いる
- ③ bytiの未来形を助動詞とし、動詞の受動分詞を用いる

<sup>2</sup>末尾の注2

④ドイツ語からの借用語wordować(worduwać)/wordowaś/wormuś(<Dt. werden)などを助動詞に用いる

が見られた。このうち①および②は他のスラヴ語に共通する受動表現であり、③④はドイツ語の影響と考えられる(cf. ワインライヒ「言語間の接触」85ページ)。

3.1. 上記④の形は最も直接的な借用(werden > wordować/ wordowaś)の例といえ、wordować/wordowaś/wormuś +動詞の受動分詞の形式で表される。ソルブ語文献の早い時代から見られ、現在の標準語では上、下ソルブ語とも標準形ではない(Faßke 1980, 212; Janaš 1984, 313)とされるが、今でも口語や方言では使用される。以下、Hinze (1966)からいくつか例を参照してみよう：

— rozterżono werdujo "wird zerrissen" [引き裂かれた](17世紀初頭のMollerによる教理問答集の訳。下ソルブ語の最古期の文献)

— Kak ta Woda pschihottowana worduje: to budże we pschichodnem Kryschi wopißane. "Wie das Wasser gekocht wird, das wird in folgende Blatt beschrieben werden." [どのようにして湯が沸かされるか、それは次のページに記されている](19世紀初頭、ブディシンで書かれたDeuka書簡集[Jene Mjeßacźne pißmo, schitkim Sserbam kTrjebnosži(sic.)]。

1809. Auf dem Titelblatt von Nr.1, We Budyschini Sałożene a wohndate wot Jana Gottlob Deuki.)

— Póten jo pjeceń, a wobjed wórdudojo rychtowany a kompot a wšoho dacu. "Danach kommt der Braten und das Mittagessen wird serviert und Kompott und alles dazu..." [それから焼肉が出され正餐が供せられ、コンポートもなにもかも一緒に添えられて…](ノイシュタット=ラウジツ中部。下ソルブ語の特徴を強く持つ上ソルブ方言から)

— Ja worduju bity. "Ich werde geschlagen. (Janaš, 314) (今の下ソルブ語の口語表現)

— Ja budu bity wordowaś. "Ich werde geschlagen werden" (ibid.)

17世紀に書かれたJacobus Xaverius Ticinus のソルブ語文法'Principia Linguae Wendicae. Quam aliqui wandalicam vocant.'の中でも受動形としてこのwordowaćが記されている<sup>3</sup>。表2(次ページ)にしめしたのはその記述である。

wordowaćによる受動表現は上ソルブ語のプロテスタンント・ヴァリアント<sup>4</sup>では比較的新しい語法とされる。プロテスタンント・ヴァリアントではbyćの未来形budżeを用いるタイプ(後述3.2.)の方が最古期の文献から検証されている。19世紀末に下ソルブ文法を著したMuckeもこのwordować-typeによる受動表現について言及している。Lötzsch ("Характер влияния немецкого языка на словоизменение имени и глагола верхнелужицкого языка." Л, 1956)では口語、方言では今日でもwordowaćに

3 Fotomechanischer Neudruck mit einem Vorwort von Friso Michałk, VEB Domowina Verlag, Bautzen, 1985. より再録。表形式にしたのは本稿論者。表記はできる限りオリジナルに近くした。動詞はpisać(pisać). なお imperfectum 以下は1.2人称のみを示す

4 末尾の注4

<表2>

	单数	双数	複数
tempus präsens	ja pisané worduju	méj wordujomej pisanej	mo wordujomé pisane
	té pisané wordujeff	wéj wordujotej pisanej	wo worduječo pisane
	won pisané wordujo	wonej wordujotej pisanej	woni worduju pisane
Imperfectum	ja worduwach pisané	moj worduwachmē pisanej	mo worduwachmē pisane
	té worduwallo pisané	woj worduwalſtei pisanej	wé worduwaſčo pisane
Perfectum	ja som pisané worduwaw	méj ſméj pisanej worduwawej	mo smé pisane worduwali
	té ſé pisané worduwaw	woj ſtěj pisanej worduwawej	wonej ſtěj pisanej worduwali
Futurum	ja budu pisané worduwać	moj bužomej pisanej worduwać	me bužomé pisane worduwać

よる受動表現が用いられ、その際分詞に用いられる動詞は完了体、不完了体双方が可能で、どちらの場合にもあまり体の意味の差は意識されないとしている：Potom worduje won brany.(ipf) "dann wird er herausgenommen" と A potom worduje muka nasypana (pf). "und dann wird Mehl daraufgestreut".

Mihałk (Der obersorbische Dialekt von Neustadt, Bautzen, 1962)はノイシュタット方言で見られるこの形の受動表現は3人称主語の場合に限られると指摘している。また Hinze(1966)も19世紀以降のテクストの中で1.2人称を主語とするwordowaćによる受動表現は見られないとしている。

3.2. ワインライヒ（前掲書：邦訳84ページ）で指摘された文法的なぞり、あるいは借入翻訳loan translation あるいは "Lehn-Form-Umschreibung[Schumann, K. Zur Typologie und Gliederung der Lehnprägungen, ZfslPh XXXII, 1965, 60-90, bes.88]の今一つの例は、上記3に示したbyti("be")の未来形+動詞受動分詞形による受動表現であろう。これは最古期のソルブ文献から見られ、19世紀まで用いられた。この受動表現の形式はおそらく、ドイツ語のwerdenが受動の助動詞と同時に未来の助動詞の機能を果たすことが影響して、ソルブ語でも未来時制を表わすbudže(<byti)が受動の助動詞に拡張されて生じたものと見ることができる。比較的新しい時代（特に19世紀中期以後）には上記3.1.のwordowaćによる受動表現がとて代わった。下ソルブ語ではbužoを助動詞とする受動表現は少なく、前出のhordowaćタイプのほうが古くから優勢であった。以下、再びHinze(1966)に挙げられている例を見てみよう：

—to ie moie czilo / kotre fa was date budze "Das ist mein Leib, der für euch gegeben wird."

[これはおまえたちに与えられる私の肉である](Warichius 1597年の問答集)

— dokelž ja schudžom tyſcheny budu "Denn ich allenthalben geängstigt werde" (Frenzelによる18世紀始めの聖書の翻訳テクスト：詩篇6-8。上ソルブ語)

— tykanc...budže kójždemu nutspšindžemu pšečelnje k jydži skićeny. "der Kuchen wird jedem Hereingekommenen angeboten" (Lötzsch, op.cit. 上ソルブ語方言)

[焼き菓子は…中にはいって来たもの一人一人にふるまわれ…]

— ...so Berßke Dżeczi we Berßkich Wuczerstłach na Berßku Rycz tak mało kedžbliwi cžineni budža. "...daß die sorbischen Kinder in den sorb. Schulen so wenig auf die sorb. Sprache aufmerksam gemacht werden" (19世紀中期の上ソルブ語)

[ソルブ人学校のソルブ人の子供はほとんどソルブ語に対し注意を向けさせられず…]

3.3. Lötzsch (1966: 338-344) にはさらに興味深い現象が指摘されている。

ドイツ語では(1)行為の受動Handlungspassiv(受動行為そのものに焦点を当てる。過去時称であればアオリスト的受け身ということもできる)と(1)状態の受動Zustandpassiv(完了した状態・事象をあらわす)が形態的に、つまりwerdenとseinという別々の助動詞を用いることによって区別される。この関係はたとえば次のようにソルブ語にも反映される：

(D1) Die Häuser wurden gebaut. あるいはDie Häuser sind gebaut worden.

家(pl)が建てられた (行為の受動)

と

(D2) Die Häuser sind gebaut. 家(pl)が建てられていた (状態の受動)

の区別に対応しソルブ語では：

(S1) - Chěže su natwarjene wordowali. あるいは...wordowachu natwarjene.

[Häuser sind gebaut worden.] [wurden gebaut.]

(S2) - Chěže su natwarjene.

[Häuser sind gebaut.]

となる<sup>5</sup>。

ところで、ドイツ語では完了の複合時称にも受動にも等しく完了分詞が用いられるが、ソルブ語では完了時制には所謂スラヴ語の"-1分詞"と呼ばれる完了分詞が用いられ、受動には-n, -t型の受動分詞が用いられる。さてドイツ語の完了形は次のように(3)完了的意味を表す (D3)の例は未来完了) 場合と(4)単にアオリスト的過去の意味を表す場合がある。他動詞構文の場合

(D3) Morgen um diese Zeit habe ich meinen Aufsatz schon geschrieben.

明日のこの時間には作文を書き終えているだろう

(D4) Ich bin nach Hause gekommen und habe dann gleich meinen Aufsatz geschrieben.

5 末尾の注5

家に帰り、すぐに記事を書いた。  
のようになる。

(D3) はソルブ語では

(S3) Jutře w tym času sym ja swój nastawk hižo napisał. (スラヴ語式の完了形)  
となるが、これと並んで

(S3-2) Jutře w tym času mam ja swój nasatawk hižo napisany.

という所有動詞měćを用いた表現がある。これは(D3)のhaben+過去分詞の複写であろう。měćは過去時制になることもできる：

(S3-3) Hdyž mějach mój nastawk napisany, sym jón hnydom wotpostał.

記事を書き終えると、私はそれをすぐに送った。(mějach: imperfect)  
一方 (D4) は

(S4) Ja sym domoj přišoł a potom (sym) hnydom mój nastawk napisał.

であるが、このアオリスト的過去の完了形の場合には\*mam ja swój nastawk hižo napisany. のように所有のměćを用いた表現はないという。逆に言えばměć+受動分詞の構文は完了過去（状態）を表わす意味に用いられ、また解釈されるということになる。上記(3)のパターンにはměćでなくbyćの時制形を使用する構文もある：

(S3-4) Jutře w tym času su džéci hižo woblečene.

明日、この時間にはもう子供たちは服を着ている（直訳：服を着せら  
れている）だろう

さらに自動詞からも受動分詞形を用いた完了過去が作られる。この場合には(S3-4)  
と同じパターンでbyćの時制形+受動分詞となる：

(S5) Lód bě roztaty. (標準形はLód bě roztatł.)

[Eis war geschmolzen] 氷が溶けた

(S6) Cuze přícahnjene buli. (方言) 外国人が移住してきた。

これは主として口語や方言で見られるが、しかし時には文章語でもみられる。

ドイツ語では完了時制と受動態に用いられる分詞の形態上の区別がない。そのため、分詞が形式的に区別される（完了の-I分詞と受動分詞。この点は他のスラヴ語の特徴と共通する）ソルブ語でも、ドイツ語の影響を受けて完了の複合時称に受動分詞が用いられる。特に最後の(S5)(S6)のようにbyćの時制形+非他動詞の受動分詞による完了時制の構文はドイツ語の複写とみることができよう。

**3.4.** スロヴィンツ語は死滅した西スラヴ語の一つで、やはりドイツ語との接触が著しかった言語である。bytiの未来形を助動詞とし、動詞の受動分詞と組み合わせる受動表現はスロヴィンツ語にも見られる (Hinze 1966: 329ff)。上記のソルブ語のケース③と平行的に借入翻訳の例と考えられるだろう。以下、Hinze (1966) に依拠しながらいくつかの例を見よう。スロヴィンツ語では助動詞となるbytiの未来形はbqdze, bądzeといった形態であるという。

— Jednemu bądze daná przes duchá mowa mądrości: drugiemu zas mowá umiejętnosci wedle tego istego duchá.... "Einem wird gegeben zu reden von dem Erkenntnis nach demselbigen Geist..."

(17世紀？新約コリント12-8 「ある人には『靈』によって知恵の言葉、ある人はその同じ『靈』によって知識の言葉が与えられ」)

cf. ソルブ語による同じ箇所コリント12-8の訳：

— Jenemu budže psches teho Ducha date, ryczecz wot Mudroſzje, druhemu pak budze date, ryczecz wot Wjedomnoſzje po tym Samym Duchu. [Frenzel (上ソルブ語) による翻訳. 1706]

— Pscheto jadnomu bužo psches togo Ducha dane groñisch wot mudroſczi / drugemu pak groñisch wot huſnaschá ſa tim ßamim Duchom. (Faburizius (下ソルブ語) による翻訳. 1709]

— Ale nino on bądze pocießony á ty mēczony "Nun aber wird er getröstet und du wirst gepeiniget. (ルカ, 16-25. 17世紀？の訳「今はここで彼は慰められ、おまえは悶え苦しむのだ」)

— Cvirxle, tá bdø poříone, a kvasne ve voct, f pot zamočone "Rote Beete, die werden zerschnitten, und sauer in Essig, im Topf eingelegt. (1913年のRudnickiの文法書の中の例)

スロヴィンツ語にはソルブ語のようなwerdenからの直接の借用語はない。スロヴィンツでは16世紀から、今世紀の消失に至るまで、この形の受動構文が最も多用されていた。

3.5. ワインライヒ（前掲書ibid.）にはスロヴェニア語における受動構文の、ドイツ語からの影響も指摘されている。19世紀中葉までのスロヴェニア語、特に教会文献などにはドイツ語からの影響が強く現われているが、受動構文についてもそれが当て嵌ると見られている。Breznik(1917-1982: 51)は聖書の訳に見られるスロヴェニア語の文章語について論じるなかで、いくつかの例をドイツ語の影響として取り上げている。そこでは19世紀まで、受動構文にソルブ語の先出③あるいはまた上記のスロヴィンツ語のケースと同じく、*biti*の未来形+受動分詞による構文が見られる(Breznik op.cit.)：

— Kadar ti bosh od koga pouablen. (ルカ. 14-8. 16世紀中期、Trubarによる訳)

— ki boste tudi zveličani v nem.. (コリント. 15-1. 19世紀中期、Krekによる訳)

一方、20世紀始めの例では"se zveličujete"と再帰代名詞のseを用いた形式が現われているという。

スロヴェニア語の場合でもスロヴィンツ語の場合でも、あるいはソルブ語の場合でも、たとえば聖書の翻訳というケースを言語接触を考える材料として扱うことには重大な問題があるようと思われる。原典（これらの場合ドイツ語）に忠実であろ

うとする意図が働けば、当該言語の構造に可能な限り原典の構文を複写しようとするであろう。そこに上でみたような構文の複写の現象が生じることは容易に想像できる。こうしたことと、言語接触の結果複寫的な構文がすでに当該言語内に体系的に位置付けられていたこととは別の問題であろう。世俗的なもの、当時の民衆の言語を書き記した文献資料が皆無かきわめて乏しい以上、結局のところは残された資料から当時の言語の姿を想像するしかないわけである。

言語接触に関する豊富な事例と問題点はスラブ語各方言に多々見い出される。それらを比較検討していったとき、何が見えてくるのだろうか。干渉の起り方に何らかのパターンや傾向が見い出されるだろうか。ワインライヒは次のように述べている：「重要なことは、2つの文法様式の干渉において、模倣の原型（model）として働くのは、その活用表（paradigm）の中でも、どちらかといえば自由であまり変化しない形態素（free and invariant morpheme）を使うもの、言い換えると、明示的な様式であるということである」（ワインライヒ 前掲書86ページ）。明示的な形態に与えられた機能の拡張という指摘は、たとえば、総合的な形態から分析的な形態への移行といった一般的な事象にも当てはめることができるかもしれない。サピアが言語変化の『駆流drift』について語ったとき、それは言語接触による変化ではなく、むしろ言語に内在する変化の要因を問題としたのだが、言語接触による変化においても内在的な要因による変化と同じように駆流となる力があるのかもしれない。その一つはたとえば上記の「より明示的な形態の機能の拡張」という形をとのかもしれない。

---

#### <末尾の注>

2. この形式には時制による形態的な変化ではなく、受動の行為をアオリスト的に述べる。従って言及される事柄は、発話時に先行すること(下のA1, A2)や、関係づけられる事象に対し先行すること(B)で、発話時や観察時に後行することについて言及する場合には用いられない。その場合には再帰動詞を使用する必要がある。

(A1) Serbski dom bu 1956 dotwarejeny. (Sewc 1984: 197)

ソルブの家は1956年に完全に建てられた

(A2) Wčera buch do předsydstwa wuzwoleny.

昨日私は上司に呼び出された。

(B) W cyłej ds. literaturje, kotraž bu pod tutym aspektom přehladana, žadyn příklad njeje.

(Faßke 1980 : 213)

この点に関して概観される下ソルブ文学においてはその様な例は一つもない  
なお、直接受け身に対する間接受動 Indirekte Passiveはdostaćを助動詞とし、対格構文の直接目的語(O)はそのままに、受益者(P)を主格主語にして作られる。行為主体

(A) はwotによって表示される：

Swalča maćeri šat šije. ⇒ Mać dóstanje (wot šwalče) šat šije.

仕立てやは母親に服を縫う 母は（仕立てやに）服を縫わせる

(A) (P) (O) (P) (A) (O)

下ソルブ標準語でも上ソルブと同じように直接受動はbuch, bu...+受動分詞で、また、状態受動はbyšの時称形+受動分詞で表される。

4. 上ソルブ語では、文章語の成立の中でプロテスタンント・ヴァリアントとカトリック・ヴァリアントの二つのヴァリアントが生じた。これは文章語の成立がミサや教会関係の文献から起こったことと密接に関わり、文章語の規範を作ろうと試みた人や、それを広めようとした相手がプロテスタンント教徒か、カトリック信者かによって生じたヴァリアントである。ラウジツ内の大半はプロテスタンントの勢力下にはいったが、上ソルブのブディンから西の一部にはカトリック勢力が残った。二つのヴァリアントの違いは文法的にはそう大きなものでなく、主に正書法の上に現われ、その最終的な統一は第二次大戦後のことであった。

5. ロシア語との対応で考えると、たとえば

Когда планы были утверждены, дома были быстро построены.

青写真が決まると、家々はすぐに建てられた

は (Dt.) Als die Pläne bestätigt waren, wurden schnell die Häuser gebaut.

あるいはAls die Pläne bestätigt waren, sind schnell die Häuser gebaut worden.

Когда я был последний раз здесь, эти дома были уже построены.

この前ここに来たときには家々はすでに建てられていた。は

(Dt.) Als ich das letzte Mal hier war, waren diese Häuser schon gebaut.

である。

#### <参考文献>

Breznik, A."Literaturna tradicija v Evangeljih in listih." 1917. (rep.) in Breznik, A. *Jezikoslovne razprave*, Ljubljana: Slovenska matica.1982, 27-54.

Faßke, H. *Gramatika hornjoserbskeje spisowneje reče přitomnosće (Grammatik der obersorbischen Schriftsprache der Gegenwart)*, Bautzen:Domowina, 1980.

Faßke, H. et al, Sorbischer Sprachatlas (SSA), Domowina: Bautzen, Bd. III, XIII.

Hinze, F. "Die Bildung des Präsens Passivi im Sorbischen und Slovinzischen" *Přinoški k serbskemu rěčespytej (Beiträge zur serbischen Sprachwissenschaft)*, Bautzen:Domowina, 1966, 321-336.

Janaš, P. *Niedersorabischen Grammatik*. Bautzen:Domowina, 1984.

Lötzsch, R. "Někotre wuskutki němskeho wliwa na werbalny system serbščiny", *Přinoški k serbskemu rěčespytej* (*Beiträge zur serbischen Sprachwissenschaft*), Bautzen:Domowina, 1966, 337-344.

Michałk, F., "Dwě hybridnej konstrukcji jednoreje sady w serbskich dialektach." *Otázky slovanské syntaxe, II. Sborník Symposia*. Brno, 1966-68, 422-425.

Michałk, F., "Wo serbsko-němskim rěčnym kontakće." *Sorabistiske přednoški*. Domowina: Budyšin, 1977, 63-69.

Schaarschmidt, G. "Aspirated stops in Sorbian and German." *Germano-Slavica*, vol.II, 1978, No.5, 337-352.

Schuster-Sewc, H., *Gramatika hornjoserbskeje rěče*. Domowina 1984.

Schuster-Sewc, H. "Sätze mit fiktivem Subjekt vom Typ os. *wono so dešćuje!* ns. *to se pada* „es regnet“ und ihre Stellung in der slawischen Syntax" *Zeitschrift für Slawistik*, Bd. XIX, 1974, 340-352.

Toporišič, J. "Slovensko-nemški jezikovni stiki" in *Družbenost slovenskega jezika. Sociolinguistična razpravljanja*. Ljubljana Državna založba Slovenije, 1991.

ワインライヒ, U 言語間の接触—その事態と問題点— (神鳥武彦訳) 岩波書店 1976.